

経験こそ人を作る

医系大学の新生、新入職員には、医療人としてのモラルが求められます。たとえば、順天堂の場合、『仁』を大学の学是として謳っています。新人は、慈しみ、思いやりをもつことの大切さを、入学、入職の時点から叩き込まれることでしょう。

ついこの間まで、平凡な高校生、大学生であった若者が、突然、ヒューマンイズムの具現者のようにふるまわなければならない。これはいささか荷が重いことでしょう。もちろん、面接試験では高邁な理想を語ったはずですが。しかし、同時に、「本当に自分にできるのか」といった不安を内心は抱いた人もいたことでしょう。

ただ、新人の皆さんには少し安心していただきたいと思います。医療人のモラルというものは、患者さんやクライアントの方との交流を通して、自然と身についていくものだからです。たとえば、看護師の場合、実際に病棟にはいって、患者さんを受け持ち、自分で看護の責任を担うようになると、仕事の意欲がわいてきます。その人にとっていい看護を行おうと思って、方法を考え、工夫を重ねようとしています。その課程でいつのまにか身についていくものこそ、看護のモラルです。

私自身を顧みれば、高校生の頃、精神科医という職業を意識しました。でも、「心病む人を救いたい」といった立派な志からだったと言え、うそになります。むしろ、きっかけは若者の知的ロマンチズムからであり、漠然と「人間」というテーマを研究したいと思ったにすぎません。

でも、医師になってわかったことは、患者さんを担当し、自分で診療に関与することぐらい勉強の意欲を鼓舞させてくれる経験はないということです。その人を理解し、人生を少しでも良いものにしようと思って、その目的に適うものを勉強しようとしています。自分にもできることがあるかもしれないと思えるようになりました。私の医師生活は、人生で初めて充実したものになりました。以来、ひとりの未熟な医学徒を今日まで生かしてくれたのは、間違いなく精神科臨床という経験です。この豊かな年月に、患者の皆さんが私に試練をお与えくださいました。この人たちへの感謝を胸に日々過ごすことが、私の「医のモラル」だと思っています。

<執筆者紹介>

- ▼東北大学(医)卒。順天堂大学講師、准教授を経て、2008年から現職。
日本の大学病院で唯一の薬に頼らない精神科を主宰。